2La-6　　ゆかたの涼しさに関する一考察

大阪教育大　○今村 律子　　坂本 正美　　奥窪 朝子

目的　今日、和服は正月や正式な場に多く着用され、日常生活着としての役割は小さくなっている。その中で、比較的着用されていると考えられるゆかたは、和服独特の形態から開口部が大きく涼しそうであるが、被覆面積が大きく暑そうにも感じられる。そこで本研究では、着用実験によってゆかたの着用感を、主に温熱的側面から、ゆかたと被覆面積を等しくし、ゆかた地を用いて製作したツーピースと比較した。また、アンケートによってゆかたのイメージやその着用感などを検討し、ゆかたの涼しさを系統的に追究した。

方法　アンケート：18～22才の男女大学生を対象とし、1993年6月に実施した。調査内容はゆかたの着用率、イメージ、部位別にみた温冷感などである。有効回収票は、女性 210、男性 110であった。着用実験：ゆかた（綿 100%）及びロング丈ツーピースドレス（被覆面積を等しくし、ゆかた地で製作した）の2種類の供試衣服を用い、女子学生を被験者として、27℃、60%RHの環境下で行った。測定項目は、皮膚温、衣服内温湿度、心拍数、全身及び局所温冷感・快適感などである。

結果　1)ゆかたの着用経験率は、男子で64%、女子では92%に及んでいた。2)ゆかたのイメージとして「涼しい、すっきりしている、素朴である」が示された。3)ゆかた着用時の温冷感では、袖口、腕、腋下部は涼しく、帯部分は暖かいと感じていることがわかった。4)着用実験において、腹部の皮膚温及び衣服内温度は、ゆかた着用時の方がツーピースの時より有意に高かった。前腕部では逆に、ゆかた着用時に有意に低い結果が得られ、上記3)が検証されたといえる。また背部衣服内温度はゆかた着用時において有意の低下を示した。